

文学から見た夏目漱石の過去とTrauma

- 出生に対する疑惑 -

矢野尊義*
yano@sejong.ac.kr

<目次>

- | | |
|------------|------------------|
| 1. 序論 | 4. 過去と心傷(trauma) |
| 2. 漱石の生い立ち | 5. 結論 |
| 3. 孤独と淋しさ | |

主題語: 心傷(trauma)、孤独(isolation)、過去(past)、虐待(abuse)、生い立ち(growth)

1. 序論

精神科医の千谷七郎は『『行人』はうつ病がよく分っていないと読めない。漱石自身神経衰弱といっているもの、今日の知識を以てすれば、内因性鬱病と診断して間違いはなかろう』¹⁾と述べた。「漱石は49歳の生涯中に4度、神経衰弱に悩まされた、といわれている。漱石の時代では、神経衰弱という用語は、今日いうところの精神病神経症・ストレス病を総括する病名であった」と述べた精神科医の平井富雄は「漱石の狂気はうつ病親和性素質の異常性格者の特徴である」²⁾と述べ、松元寛も「生来躁鬱症の傾向を持っていた漱石はこの時期、鬱状態の末期にあった」³⁾と言った。また精神科医の北垣隆一は漱石が「精神的神経症、すなわち不安ヒステリーで主症状は被害妄想症であり、胃神経症とが複合している。漱石の文学に現われるふしぎさや、強い偏向は彼の神経症または神経症的性格の表現と見ることができる」⁴⁾と述べた。塚本嘉寿はこのような研究に対して漱石の「病跡学的諸研究においては分裂病から躁うつ病とする立場、精神病から神経症をへて正常とする見解まで

* 世宗大学 国際学部 日語日文学専攻 助教授

- 1) 千谷七郎(1963)『漱石の病跡』勁草書房、p.5、pp.24-25
- 2) 平井富雄(1990)『神経症 夏目漱石』福武書店、pp.7-8、p.229
- 3) 松元寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.28
- 4) 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.190

正反対ともいえる見解さえ未解決のままに対立している。彼の精神異常に対する正しい診断を確定することは依然として困難である」⁵⁾とした。このように今まで多くの精神科医たちが漱石の精神状態を神経症や鬱病と診断し、それを証拠づけようとしてきた。これら医学の立場からの作品分析や文学者に関する研究は、作品などの資料から見てとれる症状に対して病名を診断することに主眼が置かれている。しかし、筆者は漱石に見られる不可解な精神状態は内因性の精神的病の現れであるというよりも漱石の心の中に存在するトラウマ(trauma:心的外傷)が原因で生じた外因性のものであると見る⁶⁾。それは漱石の作品に繰り返し繰り返し現われる孤独感や淋しさのみならず、漱石の晩年の作品に共通して明かされる幼少期に受けた心傷の告白から推測される。

北垣隆一は漱石が「神経症になった原因は彼の幼時の心的発達の様相にある」⁷⁾と述べ、漱石の幼児期の尋常でない心の発達が漱石を神経症にしたと言い、松元寛は「漱石は自閉症とは言えぬとしても、それに似た精神状態を幼児期に経験しているように思われる。それは具体的には『道草』に描かれた漱石の幼児期体験から推定される」⁸⁾と述べ、漱石の精神的病の原因が幼児期の自閉症的体験にあるとしたが、平井富雄が「多くの精神科医による漱石の病蹟学の論文は、彼を妄想狂とする。しかし、その発生にいたるまでの心的現象とその発生の心理過程は全く無視されてしまっている」⁹⁾と述べたように漱石が発症に至った心理過程や発症後の心理状態については、彼の作品を通してあまり十分に分析されていないと言える。いずれにしても多くの精神医学者は漱石が神経症やうつ病であるとみなし、その原因を幼児期の心の状態に探ろうとしている。しかし、神経症やうつ病とトラウマは別のものである。トラウマはあくまで外傷体験によって引き起こされる心の傷であり、これは環境によって誰にでも生じうるものであると言える。

PTSD(Posttraumatic Stress Disorder:外傷後ストレス障害)は「心的外傷場面のイメージばかり考えてしまったり、神経過敏、閉じこもりがちの生活になったり、解離症状や抑うつ症状、無気力感などが見られ、うつ病、パニック障害、恐怖症が合作することがある」¹⁰⁾と言われる。ゆえに漱石のうつ病や神経症(Neurose)と言われる症状は、トラウマ(trauma)が原因

5) 塚本嘉寿(1994)『漱石、もう一つの宇宙』新曜社、p.34

6) 大きな精神的苦痛や心的外傷体験をこうむったことによって生じた心の傷のことを心的外傷(トラウマ)と呼ぶ。心的外傷を受けた人に起こってくる精神症状群が外傷後障害(PTSD)である。(市村篤 外(2001)『マスコミ精神医学』星和書店、pp.84-86)

7) 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.282

8) 松元寛(1997)前掲書、p.52

9) 平井富雄(1990)『神経症 夏目漱石』福武書店、p.308

10) 市村篤(2001)前掲書、pp.88-89

である可能性が高いとすることができる¹¹⁾。本稿は漱石の「神経衰弱」の原因として漱石の心にトラウマがあったと見なし、そのトラウマが何であり、トラウマとなった体験がどんなものであったかを作品分析を通して明らかにする。それが漱石が病に至る心的過程や発病後の症状を説明することになる。分析する文献は孤独感や心傷が顕著に表れている『門』『彼岸過迄』『行人』『こころ』『硝子戸の中』『道草』『明暗』とする¹²⁾。

2. 漱石の生い立ち

漱石の生い立ちについては『硝子戸の中』や『道草』などの自伝的作品を除いては他にこれといった資料がない。『硝子戸の中』には漱石の記憶を辿った幼少時の追憶が描かれている。

私は両親の晩年になって出来た所謂末っ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懐妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰り返されてゐる。単に其為ばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまった。(中略)何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。私は其道具屋の我楽多と一所に、小さい筥の中に入れて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されていたのである。それをある晩私の姉が何かの序に其所を通り掛つた時見付けて、可哀そうとも思ったのだろう、懐へ入れて宅へ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱られたそうである¹³⁾。 (硝子戸の中: 481)

漱石が生まれるやいなやなぜ里子にやられたのか、その理由については明確なことはわからない¹⁴⁾。江戸時代が終わり、明治時代が始まるという大きな時代的大転換期にあつて

11) 外傷体験によって引き起こされる精神障害は、PTSDだけではない。うつ病や不安障害、身体化障害などさまざまなものが合併してあらわれる。(倉本英彦(2002)『社会的ひきこもりへの援助』ほんの森出版、p.35)

12) 『門』から『彼岸過迄』『行人』へと彼の主題は、絶対の孤独と狂気にまで追いこまれてゆく。(猪野謙二「日本の思想家漱石」江藤淳外(1977)『芸文読本 夏目漱石』河出書房新社、p.63)『門』以後の作品の基調をなす「淋しさ」である。(上出恵子「夏目漱石『彼岸過迄』序論」玉井敬之 外(編)(1991)『漱石 作品論集成 第八巻 彼岸過迄』桜楓社、p.213)

13) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第八巻 小品集』岩波書店、p.481 以下『硝子戸の中』の原文引用は本書による。

14) 金之助が生後間もなく里子に出された理由はよくわからない。少くとも彼は歓迎されて生れた子では

名主の地位を失うという没落階級の苦しい経済的事情があったのかもしれない¹⁵⁾、それにしても末ッ子一人を食べさせることができないような家柄でもなさそうであり、そのことがいっそう漱石の心に痛手を与えているように思える。漱石は自らの出生に対して何らかの不安を感じていたのではなかろうか。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢきまたある家へ養子に遣られた。それは慥私の四つの歳であったように思う。私は物心つく八九歳迄其所で成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻る様な仕儀となつた。浅草から牛込へ遷された私は、生れた家へ帰つたとは気が付かず、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思つていた。さうして相変らず彼らを御爺さん、御婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。

(硝子戸の中: 481-482)

生後まもなく貧しい夫婦にあずけられたかと思うと四歳頃にはまた別の家に養子にやられ、九歳になって実家へ戻つた後も両親を知らなかつたというのであるから漱石がいかに親から愛を受けていなかったかがわかる¹⁶⁾。

私は普通の末ッ子のように決して両親から可愛がられなかつた。これは私の性質が素直でなかつたためだの、久しく両親に遠ざかつていた為だの、色々の原因から来ていた。とくに父からは寧ろ過酷に取扱われたといふ記憶がまだ私の頭に残っている。それなのに浅草から牛込へ遷された当時の私は、なぜか非常に嬉しかつた。(中略)下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。「貴君が御爺さん、御婆さんだと思つていらつしやる方は、本当はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。」

(硝子戸の中: 482)

漱石が実の親が誰であるかを知つたのも下女の親切心を通してであつた。漱石が家の主人の実の子であることを盗み聞きした女中は実の親が誰かも知らずにいる「私」を不憫に思つてそつと教えたのである。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸

なかつた。(江藤淳(1970)『漱石とその時代(第一部)』新潮社、p.19)

15) 彼が育つたのは文明開化の時代であつた。名主の(よき)生活を許していた政治体制が根本からゆるんでいた。(上掲書、p.7、p.11)

16) 九歳のころ帰つてはきたが戸籍はそのままであつたから、実父はじめ一家の者の彼に対する態度を冷くした。(北垣隆一(1968) 前掲書、p.124)

をいくら辿って行っても、御婆さんに見える。(中略)悪戯で強情な私は、決して世間の末ッ子のやうに母から甘く取扱われなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に対する私の記憶の中には、何時でも籠もつてゐる。(中略)母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上がつて来て呉れた。(中略)私は大変嬉しかつた。それで安心してまたすやすや寝てしまつた。
(硝子戸の中: 502-506)

いくら父親が冷酷であつたとは言え、実の子である限り親の愛情を隠しきれないのが母親であるが、漱石が実家に戻つてまもなく死んだ母親は漱石が実家に戻つてからも親の愛情を十分に表現できた女性であつたとは思われない¹⁷⁾。漱石は実家に戻つてすら親の愛情というものを知らずに育つた¹⁸⁾。それゆえある日母親が漱石の呻き声を聞いて二階まで駆け付けてくれたことにこれほどの喜びと安心感を抱いたのである。それまで母親の愛を受けたことのない子でもあつたかのようにである¹⁹⁾。作品から見る限り、漱石の実家での生活もあたかも他人の家にいるかのような何かぎこちないものであつたことがわかる。彼は幼ない頃から人に甘えるということを知らずに育つたわけである²⁰⁾。

このように『硝子戸の中』に描かれている漱石は九歳まで実の親を知らず、実家に戻つた後も親から十分な愛を受けたとは言えない。「我楽多といっしょに、箆の中に入れられて、夜店に曝されていた」というのが、漱石の記憶から出たものかどうかはわからないが、ぞんざいに扱われ、実家においてさえも「両親から可愛がられなかつた」どころか「父からはむしろ過酷に取扱われた」という記憶がまだ残っている」という悲惨な幼少生活を送つたことがわかる。

17) 大部分の精神疾患は、立派に成熟し精神的に成長するのに必要な愛を親から与えられない、あるいはその愛に欠陥があることに因っている。(M.スコット・ベック/矢野隆子 外(訳)(2004)『愛の心理療法』創元社、p.182)

18) 対人関係の基本は親子関係であることを考えると(虐待は)対人関係に著しい障害が生じる。甘えたり、人見知りをしないという無差別的な愛着行動がある。親密さは虐待を招くものと予防線をはり、親密な人間関係を結ぶことを避けるため、孤立を示す。(倉本英彦(2002)前掲書、p.39)

19) 強い愛情を抱くべき親から虐待を受けたことにより、子どもは自分を否定し、親愛着を形成するしかない。周囲から孤立し、頼ることのできない状況に置かれるとたまに与えられる優しさは天恵のような効果を発揮し、極端に親を理想化することがある。(上掲書、p.38)

20) 被害妄想を抱く者たちの心理は、甘えの心理の病的変容として理解することが可能である。彼らが家庭的にも孤立している。彼らのうち少なからぬ者は人に甘えるということを経験しないで育っている。(土居健郎(1987)『「甘え」の構造』弘文堂、p.157)

3. 孤独と淋しさ

千谷七郎は「漱石の孤独は、漱石の言う神経衰弱から来ているもので、孤独、厭世感、焦慮と並べられる猜疑心の高まりが外見上迫害妄想に似た様相を示す時期があった²¹⁾」と言う。『門』と『明暗』には鏡の中の自分をまるで変な異物でもあるかのように感じ、不思議な感慨に陥る場面がある²²⁾。

彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、不図此影は本来何者だろうと眺めた。首から下は真白な布に包まれて、自分の着てある着物の色も縞も全く見えなかった²³⁾。 (門: 757)
何時も違った不満足な印象が鏡の中に現はれた時、彼は少し驚いた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ気が先づ彼の心を襲った²⁴⁾。 (明暗: 609)

『門』で鏡に映った自分をつくづく眺め、その姿を「自分の影」と言い、「此影は何者だろう」と自問したのは、ふと自分はいったい誰なのかと疑問視したからだと言える。自分が誰かという疑問は自分の存在の根拠がわからないという至極不安定な心理状態を表している²⁵⁾。また『明暗』で鏡の中の自分を「自分の幽霊だ」というのは、現実感覚が希薄になっているために自分の姿を見ても自分であるという実感がわからないからだと言える²⁶⁾。生きていることに興味がなくなり、心が過去の世界にあるためである。次は『ころ』と『行人』の一部である。

世の中で自分が最も信愛してゐるたった一人の人間すら、自分を理解してみないのかと思ふと悲しかつたのです。(中略)私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたつた一人住んでゐるやうな気のした事も能くありました²⁷⁾。(ころ: 268) 斯うして自分で自分を離れた気分を持ち

21) 千谷七郎(1963) 前掲書、pp.18-19

22) 北垣隆一は「心のわだかまりの核心を吐き出したものが『明暗』であった」と述べた。しかし、「異様な性格や感情や行動がよく説明もされぬままに展開され、また漱石の心の奇妙なわだかまりがいたるところに露出されている。このわだかまりは何が原因でどこが痛みの源泉なのか、一向にはつきりせず、何物かにつかされたようにこれを発表している」(北垣隆一(1968) 前掲書、p.65、p.12)とした。

23) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第四巻 三四郎 それから 門』岩波書店、p.757。以下『門』の原文引用は本書による。

24) 夏目漱石(1964)『漱石全集 第七巻 明暗』岩波書店、p.609。以下『明暗』の原文引用は本書による。

25) 漱石の不安と空虚とは、おのれの生を意味づける根拠喪失を意味した。(桶谷秀昭「淋しい明治の精神」(江藤淳外(1977)『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社、p.77)

26) 生命への執着は一切うしなわれ、死へのあこがれのみがある。このようなひとが現世に生きる姿はまさに亡霊といえよう。(神谷美恵子(1991)前掲書、p.159)

ながら、上部丈を人並に遣つて行くのに傍の者は何故不審がらないのだろうと疑 ぐつて見たりした。(中略)さうして自己と周囲と全く遮断された人の淋しさを独り感じた²⁸⁾。(行人: 644)

「どこからも切り離されて」自分一人存在する孤独感や「周囲と全く遮断された人の淋しさ」は「自分で自分を離れた気分」を感じることで自己に対してさえも他人であるかのように感じる。『行人』の二郎のこの「自らにも周りにも現実感が感じられない」ような感覚は、「自分が存在する実感がなくなったり、自分が未知の人間であるように感じる。現実感喪失を伴うことも多い²⁹⁾という解離性障害の一つと言われる離人症性障害を連想させるが³⁰⁾、これは『行人』執筆時の漱石の精神状態そのものだったと言える。

私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつてしかたがなくなつた結果、急に所決したのではなかろうかと疑がひ出しました。そうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだという予覚が、折々風のやうに私の胸を横通りはじめたからです。(こころ: 280)

『こころ』の先生は友人の自殺の原因をこのような孤独感の危機に見いだすようになるのだが³¹⁾、このような人間世界を離れたような極端な孤独感はなぜ生まれるのだろうか。千谷七郎は「『心』はまだ鬱病の余波的な虚構であつて、この厭世は鬱病から来ている。鬱病の自殺は厭世感や苦悶の渦巻きの中で自殺する。『心』は漱石の厭世感を清算自殺に結びつけて構成した³²⁾」と言ひ、先生の孤独が鬱病からくる厭世感によるものであり、漱石は自分の精神状態を先生に投影させたとした。しかし、『こころ』の先生の憂鬱と自殺が漱石の心の反映であることが事実であるとしても、それをもつてただちに漱石を鬱病と見なしてよいだろうか。大人になってからの持続的な憂鬱な気分は、幼児期の心傷体験が原因となる心的外傷性後ストレス障害の特徴でもあるからである³³⁾。

-
- 27) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第六巻 心 道草』岩波書店、p.268。以下『こころ』の原文引用は本書による。
 28) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第五巻 彼岸過迄 行人』岩波書店、p.644。以下『彼岸過迄』『行人』の原文引用は本書による。
 29) 市村篤(2001) 前掲書、p.47、p.95
 30) ふつう人は一個の人間として統一され連続しているという自己意識を持っているが、その自己意識の統一性・連続性の破綻が解離である。解離現象が量的・質的に重症化し、コントロール機能が失調したものが解離性障害である。(上掲書、p.94)
 31) 生きがいをうしない、絶望と虚無の暗い谷底へおちこんでしまったひとの多くは自殺を考える。(神谷美恵子(1991) 前掲書、p.138)
 32) 千谷七郎(1963) 前掲書、p.61
 33) 幼児期・小児期のきわめて個人的な隠された悲哀の体験すら、思春期あたりになって特有の不安ゆう

一方、松元寛は『『ころ』や『道草』の中に瀕出する主人公の『淋しい』という感情は、漱石自身の他人を前にした戸惑いや違和感と別のもではなかったか、自然な人間関係の中で自然に対人関係を持つように育ってきたのとは異なる、私たちはそこに漱石の幼児期における自閉的精神状態の痕跡を見ることができる³⁴⁾と述べ、漱石の淋しさを幼児期における自閉症の結果と見なした。しかし、漱石の孤独感や「淋しい」という感覚が現実の人を対象にしたものでなかったことが事実であるとしてもそれが彼の幼児期における自閉症の痕跡であるとは断言しえない。なぜなら漱石の幼児期における孤独は幼少期の漱石自身が招いたというより彼が生まれるやいなや家族から一人隔離(isolation)され、里子や養子にやられたという疎外された環境によって生じた必然的結果であったと言えるからである。

したがって漱石特有の孤独や淋しさが病的様相を帯びているのは事実であるが、それが何を原因としているのかについては、彼の幼児期の生活や育った環境を知り、彼の心理過程を明らかにする必要がある。生後まもなく里子や養子として実の親を知らないまま他人の家に送られた漱石が置かれていた状況は「世の中にたった一人住んでいる」ような孤独感を生み、堪えられないような淋しさを感じさせていたことがわかる。

4. 過去と心傷(trauma)

漱石の作品に共通した孤独感や淋しさは幼少時の漱石の心傷によるものであると見ることができる。平岡敏夫は「漱石の作品においては隠されていた『過去』が作品の進行にしたがって明瞭なたちをあらわしてくることが多い。『消えぬ過去』の物語として概括するにふさわしい『それから』以下の『門』『彼岸過迄』『行人』『ころ』『道草』『明暗』の作品が展開してゆくことになった³⁵⁾と述べたが、漱石は自分の幼少期を過去と称している。ここに彼の心傷が現われていると言える。

私は過去に於て多くの人から馬鹿にされたといふ苦い記憶を有つてゐる。(中略)他に対する私の態度はまづ今迄の私の経験から来る。(中略)今の私は馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深

うつ体験として再現してくるといい、心的外傷性後ストレス障害という。(笠原嘉(1996)『軽症うつ病-ゆううつ-の精神病理-』講談社、pp.50-51)

34) 松元寛(1997) 前掲書、pp.54-55

35) 平岡敏夫(1979)『漱石序説』稿書房、p.11、p.42

くて人を容れる事が出来ないか、此兩方だけしかない様な気がする。不安で不透明で不愉快に充ちてゐる。もしそれが生涯つづくとするならば人間とはどんなに不幸なものだろう³⁶⁾。

(硝子戸の中: 492-493)

『硝子戸の中』と『道草』は、漱石の作品の中でも珍しい小説であると言われる。『硝子戸の中』によると漱石は幼少期に「人から馬鹿にされた」り、「人に騙され」た経験があり、それが「人を容れる事が出来ない」原因となっている。そしてそれが漱石を故郷の土から遠ざかせていると言える。不幸な「過去」を思い出すことを避けるためである。

彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。(中略)それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた³⁷⁾。

(道草: 291、295)

ここで「故郷の土を踏む」ことにより「淋し味さへ感じた」とある。「不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となる」からである。このことから漱石の心の痛みは彼が育ったはずのこの故郷から来ていることがわかる。では、漱石の言う自分の過去とはどのようなものであろうか。漱石の生い立ちについてはすでに『硝子戸の中』で概観したが、漱石本人が感じる不幸な過去とは何であらうか。次のような心の吐露は彼の「過去」を告白しているように思われる。

「よろしい」と先生が云つた。「話ませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう。」(こころ:86)私は他に欺むかれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺むかれたのです。(中略)私は彼らから受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄背負はされてゐる。恐らく死ぬ迄背負はされ通しでせう。(こころ:83-84)私は国を立つ前に、又父と母の墓へ参りました。私はそれぎり其墓を見たことはありません。もう永久に見る機会も来ないでせう。(こころ: 171)

ここでは「親戚のものからあざむかれた」とある。既に述べたように漱石は生まれるやいなや里子にやられ、3、4歳ごろには養子にやられた。そのみならず9歳ごろになって実家に戻ってからも実の父から冷酷に扱われた。戻った後も養家の姓を名のっていたからである。邪悪な養父は養子を数年世話してやったのをいいことにこの養子を実家に返した後ものちのちまで彼を利用しようとしたのである。またこの養父の腹の内を知っている実の父

36) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第八巻 小品集』岩波書店、pp.492-493

37) 夏目漱石(1985)『漱石全集 第六巻 心 道草』岩波書店、p.291、p.295。以下『道草』の原文引用は本書による。

はまた実の父でこの厄介なことになってしまったこの子のことにこれ以上関係したくなかったことがわかる。

(父)「食はず丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方でするのが当然だ」

(島田)「なに実家に預けて置きさへすれば何うにかするだろう。其内健三が一人前になって少しでも働らせるやうになつたら、其時表沙汰にしてでも此方へ奪還くつてしまえば夫迄だ」「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」

(道草: 555-556)

これは養家の養父と養母の離婚により、健三が実家に戻されてから聞いた実家の父と養父の話であるが、9歳そこそこの健三にとってこれらの大人の言葉がどれほど衝撃的であったかは想像に難くない。それは親の子に対する裏切りであり、健三は養父からも実家の父からも「騙された」と思ったに違いない。殊に健三を傷付けたのは悪い養父の悪態以上に実家の父の本音であったろう。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに欺んな出来損ひが舞ひ込んで来たかという顔付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に与へなかつた。今迄と打つて変わった父の此態度が、生の父に対する健三の愛情を根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に対してにこにこしてみた父と危介物を背負ひ込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚ろいた。

(道草: 554-555)

「血のつづいた」実の父であるはずの実家の父が見せた態度の変化は健三の「父に対する愛情を根こぎにして枯らしつくした」のである。このように『ころ』『硝子戸の中』『道草』に書かれた自分の生い立ちに関する内容はみな等しい。それは漱石の幼少期が「不安」で「屈辱」に満ちたものであり、このうえなく「不幸」なものだったということである³⁸⁾。『硝子戸の中』では「人に騙される」と言い、『ころ』では「欺むかれた」と言ったその内実は、「実家に預けて」「働らせるよになつたら」「給仕でも何でもさせる」という養父のたくらみや実父の「食わずだけは仕方がないから食わして遣る」が、「その外の事は」「先方でするのが当然だ」

38) 思春期までに体験するような外傷的出来事が問題となる。長期にわたり繰り返される慢性的被害では被害者の人格発達や他者、社会、将来に対する考え方に多大な影響を及ぼす。(倉本英彦(2002)前掲書、p.34)

という実の父親としては驚くべき内心であったと推測される。こういった幼少期に受けた背信体験は同時に世への不信となり、自ら歪んだ性格を形づくらざるをえなかったと言える³⁹⁾。実家の父親にまで「あざむかれた」「屈辱」に満ちた幼少期であり、漱石の言うに言われぬ悲しい「過去」だったと言う他ない⁴⁰⁾。

彼は自分の生命を両断しやうと試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却つて自分を追掛けて来た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。(道草: 396)

これは晩年の漱石の精神状態を表わしている。漱石は過去の記憶を「切り棄て」てしまいたいと切に願っている。この過去の記憶が今の自分を苦しめるからである。その苦しみは「自分の生命を両断し」てしまいたいほどのものであり、生きることを断念させるほどのものだったことがわかる。それにもかかわらず、「過去が自分を追掛けて来」と言う。付きまとって離れない強迫観念のような恐れである。彼の「行手」を阻み、彼を後ずさりさせるほどの恐怖である。ここに漱石のトラウマがあると言える。彼は幼児期の過去の記憶にさいなまれ、脅えていることがわかる。

北垣隆一は漱石が「憎悪と敵意、のちには無視と冷淡をもって実父に対していた」⁴¹⁾と述べ、松元寛は「肉親との細やかな愛情の交流が希薄な環境の中で幼児期を過ごしたために自閉的な精神状態を経験していることを示している。漱石文学を読み進んでゆくに従って、その幼児体験が深刻な痕跡を漱石の精神の根底に残していることに気づかないではいられない。漱石末期の作品、特に『こころ』や『道草』は、そのような漱石の精神の傷跡を私たちに開示してくれる作品だ」⁴²⁾と言い、塚本嘉寿は「漱石は幼少年時に望まない子として生まれ、里子養子などに出されて人生最初期における基本的信頼感の形成が損なわれ、また自律期における葛藤など、心理的課題克服にも障害を来し、それが後年の精神障害の大きな決定因となった」⁴³⁾と述べた。いずれも漱石の精神障害の病因が幼児期に発生しているとしている。しかし、漱石が幼児期に受けた心の傷は親の愛情不足や信頼感の不形成程度のもではなかったようである。それは児童虐待と言うにふさわしい親の子に対する冷遇であり、言葉によるとは言え、子供を恐怖と脅えにまで至らせるほどの心理的虐待であった。

39) 他者や社会に対する信頼感が失われ、孤立感や疎外感が生まれる。(倉本英彦(2002)前掲書、p.35)

40) 漱石は「消えぬ過去」を生涯背負いつづけた人である。(平岡敏夫(1979) 前掲書、p.9)

41) 北垣隆一(1968) 前掲書、p.206

42) 松元寛(1997) 前掲書、p.54

43) 塚本嘉寿(1994) 前掲書、p.34

漱石が幼少期に受けた心傷(trauma)はその後も漱石の心を支配し、一生彼を苦しめたと言える。では、何が一番の心傷となっているのだろうか。

父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知ってるか」と云った。(中略)母は「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上るから安心なさいよ」と云った。(中略)両親に対する僕の記憶を生長の後に至つて遠くの方で雲らすものは、二人の此時の言葉である。(彼岸過迄: 206)

『彼岸過迄』では市蔵が成長しながらもいつも気にかかった悩みを抱えながら育つたことが描かれている。それは自分自身の出生に対する不安であると言える。自分の本当の親が誰なのかという出生に対する疑問である⁴⁴⁾。

市蔵の太陽は彼の生れた日から既に雲つてゐるのである。(中略)一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事が出来る(中略)彼は姉の子ではなくつて小間使の腹から生れたのである。(中略)「僕は僻んだ解釈ばかりしてゐたのです。僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却つて安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事ありません。其代り何か急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」(彼岸過迄: 309-311)

「僕は僻んだ解釈ばかりしてゐたのです」とあるように須永の推測はもっと深刻なところまで及んでいたことがわかる。幼い頃から何か腑に落ちないところがあり、ある事実を予感し、その事実を知る日が来ることを今まで恐れていたのである。須永の孤独感はこの自分の出生の秘密に対する不安に原因があったと言える。はたして彼の臆測は本当だった。須永は結局自分が私生児であったことを知る。ここでは「安心して気が楽になりました」と言ったが、事実を宣告される前の緊張感や不安から解かれて「気が楽になつた」としても彼の「淋し」さは、いっそう深刻なものとなるしかなかった。「世の中にたつた一人立つてゐる」ような「心細」さが、もはや現実のものとなったからである。これは大人になってからの体験であったが、次は幼少時の体験である。

「御前の御父ッさんは誰だい」健三は島田の方を向いて彼を指した。「ぢや御前の御母さんは」健三は御前の顔を見て彼女を指さした。是で自分達の要求を一応満足させると、今度は同じやう

44) それは漱石が過去を隠しているからだと言えないだろうか(平岡敏夫(1979) 前掲書、p.31)

な事を外の形で訊いた。「ぢや御前の本当の御父さんと御母さんは」健三は厭々ながら同じ答を繰り返すより外に仕方なかった。(中略)彼等は顔を見合せて笑つた。(中略)「御前は何処で生まれたの」欺う聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門(中略)を挙げて答へなければならなかった。(中略)「健坊、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御云ひ」彼は苦しめられるやうな心持がした。
(道草: 404-405)

『硝子戸の中』によれば漱石は九歳まで自分の実の親を知らされないまま養子に出されていたわけだから預けられた養家の夫婦が自分たちを親だと信じさせることも不可能ではなかったかもしれない。しかし、ここで健三は自分の親が誰か知らない状態である。健三は島田やその妻を本当の親だとは思っていない。養父である島田やその妻の方も「御前の御父ツさんは誰だい」と言って健三に「彼を指」ささせておきながら、今度は「ぢや御前の本当の御父さんと御母さんは」とあたかも何かを暗示するかのようこの幼い子に迫っている。それは健三から実の親と思われたかったからではなく、健三を育てたことを健三に恩に着せたかったからである。この子を通して何らかの代償を得るためにわざと「御前本当は誰の子なの」と言って彼に自分がこの夫婦の実の子でないことを悟らせようとしたのである。

では、健三は自分の実の親が誰であるか疑問を持たざるをえないことになり、自分がなぜここにいるのか悩まざるをえないことになろう。あたかも孤児が次から次へと家を回され、行きどころがなくなるように漱石もまた誰一人として頼る者のない孤児のような境遇にあったのであろう。自分が誰の子なのか「隠さずにさう御云ひ」と言われた後で健三は「苦しめられるやうな心持がした」というのは、健三がここで罪意識を抱かざるをえなかったことを表わしている。自分がなぜここにいるのか、自分がなぜこの人たちにこういう扱いを受けなければならないのか、健三は深い悲しみと不安を抱いて探索せざるをえなかったことであろう⁴⁵⁾。

私はついで母の里へ伴れて行かれた覚えがないので、長い間母がどこから嫁に来たのか知らずに暮していた。(中略)私の母はすべて私にとって夢である。途切れ途切れに残っている彼女の面影をいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとてども髣髴する訳に行かない⁴⁶⁾。

(硝子戸の中: 413-414)

45) 外傷体験によって「このような目にあつた自分が何か人となちがっているのではないか(特に罪悪感を伴う場合が多い)」と人とかかわることができなくなる。(倉本英彦(2002)前掲書、p.36)

46) 夏目漱石(1967)『夏目漱石(二)』集英社、pp.413-414

漱石が牛込の「祖母」を実の母親と知って接したのはわずか7年たらずの間であった⁴⁷⁾。それゆえ『硝子戸の中』で「私の母はすべて私にとって夢である」と書いてあるのは「私」にとって母が夢のようにすばらしい存在だったというのではなくて、「私」にとって母とは夢想するだけの存在だったという意味と捉えることができる⁴⁸⁾。母親に対する願望はあっても母親との接触は少なく、その面影が「途切れ途切れに残っている」にすぎなかったからであろう。

父親の愛はもちろんのこと、母親の愛すら知らずに育った彼の幼児期は、まさに彼の過去と言うにふさわしく、不安と恥辱に満ちていたと言える。この一つ一つの悲しい出来事が心傷として幼少児期の彼の心に刻まれ、それが深い傷痕を残していると言える。その中でも最大の不安は、「本当は自分は誰の子か」ということだろう。『門』や『明暗』で鏡の中の自分を見て、いったい自分は誰だと自問するのは、彼のこの不安な心境の吐露であったと言える。

5. 結論

以上のように漱石の作品に現われる淋しさを彼の生い立ちや孤独感の側面から分析し、漱石の作品に一貫して現われるこの淋しさがどこから来るのかについて分析した。漱石の特異な人格についてはすでに精神医学や心理学的立場から多くの研究がなされてきたが、それらの多くは精神病理学的観点からなされたものであり、作品から診た症状とその診断に重点がおかれていた。本稿は作品に現われている奇異な漱石の精神状態の原因は漱石が幼児期に受けた心の傷にあると見る。すなわち漱石の心の中にあるトラウマが彼の人格を特異なものとし、それが一貫して作品に現われていると見る。問題は漱石のトラウマが何であったかであるが、漱石が幼児期に両親を知らないまま里子や養子にやられ、そこでどういう体験をし、何を感じたかに糸口がある。漱石は孤児のような立場で親の愛を受けることなく育った。いな、養家夫婦からは物的代償を得るための交換物として利用され、実の父からさえ戻ってくるべきではないのに戻って来た厄介な邪魔物として扱われた。

47) 母親と死別したのは漱石が十五歳の頃であった。(荒正人「漱石の暗い部分」日本文学研究資料刊行会(編)(1973)『夏目漱石』有精堂、p.63)

48) 漱石の暗さは、幼児期に満たされなかった母への愛の固着、退行と深く関係する。漱石の幼年時代の不幸は、生涯彼の暗さとなって退行的な心理状態に彼をひきずりこんだ。(平井富雄(1990)前掲書、p.220)

生まれた時から親の愛を受けず、ただ一人で生きていくことを余儀無くされた漱石は、幼児の時期から周囲の人たちに甘えることができず、大人たちから受けた心傷を心に抱いたまま一人で成長していくほかなかった。そのような冷遇された境遇の中で彼は自らの出生に対する疑いを持たざるをえなかったと言える。そしてその不安が漱石の性格を歪め、一生彼の精神世界を闇の中に落とし込んだと言える。

結局、漱石を最も悩ませたものは「本当は自分は誰の子なのか」という疑惑にあったと言える。それは彼が生後すぐ里子や養子に送られ、実の親が誰であるか明かされないまま育ったことから感じざるをえなくなったと言えるが、最も大きい心傷は彼が養家から実家に戻ってきた時の実家の父親の態度にあったと言える。もし本当の親であればなぜああいふ態度がとれるのかという疑問であろう。実の親が誰であるか知らぬまま孤児のように育てゆかなければならなかった漱石がやっと帰ってきた実家で待っていたものは父親の冷遇であり、「子としての待遇を与えない」差別であった。このような実の父親であるはずの人が漱石に与えた心傷は彼が養家で受けた恥辱以上のものであったと言える。これが漱石の「過去」であり、トラウマ(trauma)であったと言える。

【参考文献】

- M.スコット・ベック/矢野隆子外(訳)(2004)『愛の心理療法』創元社、p.182
 荒正人「漱石の暗い部分」日本文学研究資料刊行会(編)(1973)『夏目漱石』有精堂、p.63
 猪野謙二「日本の思想家漱石」江藤淳外(1977)『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社、p.63
 上出恵子「夏目漱石『彼岸過迄』序論」玉井敬之 外(編)(1991)『漱石作品論集成 第八巻 彼岸過迄』桜楓社、p.213
 桶谷秀昭「淋しい明治の精神」江藤淳 外(1977)『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社、p.77
 井上敏明(1997)『無気力症』朱鷺書房、p.206
 市村篤(2001)『マスコミ精神医学』星和書店、p.46、p.89
 江藤淳(1970)『漱石とその時代(第一部)』新潮社、p.19
 笠原嘉(1996)『軽症うつ病・ゆううつ病の精神病理』講談社、pp.50-51
 神谷美恵子(1991)『生きがいについて』みすず書房、p.145、p.154
 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.190
 倉本英彦(2002)『社会的ひきこもりへの援助』ほんの森出版、p.35
 千谷七郎(1963)『漱石の病跡』勁草書房、p.5、pp.24-25
 塚本嘉寿(1994)『漱石、もう一つの宇宙』新曜社、p.34
 土居健郎(1987)『「甘え」の構造』弘文堂、p.157
 夏目漱石(1964)『漱石全集 第七巻 明暗』岩波書店、p.609
 _____(1985)『漱石全集 第六巻 心 道草』岩波書店、p.268
 _____(1985)『漱石全集 第五巻 彼岸過迄 行人』岩波書店、p.644
 _____(1985)『漱石全集 第四巻 三四郎 それから 門』岩波書店、p.757

_____ (1985)『漱石全集 第八卷 小品集』岩波書店、pp.492-493

_____ (2013)『道草』新潮社、p.5、p.9

平井富雄(1990)『神經症 夏目漱石』福武書店、p.308

平岡敏夫(1979)『漱石序説』稿書房、p.11、p.42

松元寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.52

논문투고일 : 2017년 10월 08일

심사개시일 : 2017년 10월 17일

1차 수정일 : 2017년 11월 14일

2차 수정일 : 2017년 11월 16일

게재확정일 : 2017년 11월 17일

〈要旨〉

文学から見た夏目漱石の過去とTrauma

- 出生に対する疑惑 -

矢野尊義

漱石のトラウマは幼少期に親を知ることなく親元から隔離され、親の愛を受けずに孤児のように一人で生きていかなければならなかったことであり、養父母や実父から受けた屈辱的言動や精神的虐待が心の傷となっている。殊に実の父親の冷酷さをも知って生じた自分の出生に対する疑いが生きる不安となっている。これが漱石の「過去」であり、トラウマ(trauma)であったと言え、またこれが漱石の一生を不安で孤独で淋しいものにしていくと言え。ゆえに多くの精神医学者が言う漱石の神経症やうつ病の症状もこの漱石の幼児期の心的外傷が原因であると言え、よって漱石の精神状態は必ずしも内因性の精神病理であったとは言えない。

Trauma Appearing in the Literature of Soseki Natume

- Doubt of His Birth -

Yano, Takayoshi

Soseki wrote his miserable lonely life as if he were an orphan when he was adopted. He did not know his parents until 9 years old nor could not live with his family. He has grown as adopted son being isolated himself from his family.

He has never experienced parents love, mother's love and he could not have attachment for person as child. He has grown having anxiety and conflict changing his adopting family two times. Even after returning his home he was not loved by his parents and he felt loneliness even in his family.

We can guess that he became to doubt his birth, and his parents. He may wonder whether they are real his parents or not. We can see that his spiritual symptoms is caused by trauma having been experienced in his childhood.